啐啄同機

大阪市立榎本小学校
5月11日
NO、5

いじめ・いのちについて考える　1

今日の朝会で、いじめ・いのちについての話をしました。小学校の場合、1年生と6年生では成長の差が大きいので、同じ話は難しいと思い「低」と「高」を分けて話しました。

低学年は友だちと仲良くするため、場面ごとに子ども達に「どんな声かけ」をするのがいいのかをクイズ形式考えてもらいました。

言葉は一度口から出すと取り戻すことはできません。一言で仲が悪くなることもあれば、一言で仲良くなることもあります。

「言」の甲骨文字は、口から「矢」のようなものが出ている文字もあれば、口から「ガス（毒ガス？）」のようなものが出ている文字があります。大昔の人も、言葉の怖さを知っていたようです。

高学年は、「大平光代」さんのお話を取り上げました。

大平さんは、中学生の頃、激しいいじめを受けました。親友だと思っていた3人の友達に裏切られて死も覚悟しました。悪い仲間と付き合うようになりましたが、立ち直り弁護士として活躍、大阪市の助役も勤められました。自伝的な著書も執筆しました。

今回はその書籍をもとに、話を組み立てました。

大平さんが立ち直ったきっかけは、たった一人のおじさんでした。後にお父さんになる人です。

本気で心配してくれる。本気で怒ってくれる。本気で悩んでくれる。そんな一人の本当に信頼できる人が大平さんを立ち直らせました。本当に信頼できる人が一人いれば人は強くなる。何度でもやり直すことができる。絶対に死ぬんじゃない、ということを大平さんは強く訴えています。

書いていて、三浦春馬さんのことを思い出しました。将来有望な役者さんで、仕事も順調だった。そんな春馬さんが、自ら死を選んだ。死ぬつもりならなんでもできたはずなのに、「なぜ？」という疑問しかありませんでした。

逃げることも時には必要です。戦って、消耗して、傷ついて、命を削る。そんなことをするぐらいなら逃げていいのです。いや、逃げるべきなのです。

子ども達の目の前には、多くの選択肢があります。苦しいときは、その選択肢が見えていないだけなのです。逃げることは、卑怯でも、負けることでもありません。命よりも大切なものなどありません。

榎本小学校　　校長　篠﨑　勇